

本の紹介

蒲生俊敬著「インド洋 日本の気候を支配する謎の大海」
講談社ブルーバックス, 238p, 2021年8月20日発行
1,000円(税別), ISBN978-4-06-524696-2

日本の夏はずいぶん暑くなった。35度を超えるとさすがに暑いと思うけれど、30度くらいならばたいしたことないと思うようになった。そして、雨が降ると、今度はすぐに大雨—線状降水帯になって、洪水被害があちこちで起きる。なんということだ。みんな温暖化のせいだろう、いや、海の温度も上がったからだろう、などと素人考えをしていた。ふと、もっと熱い赤道域では海はどうなっているのだろうと思った。そんなとき、本書「日本の気候を支配する謎の大海」に出会った。インド洋は「影の大将」だそうだ。

本書は見たことも聞いたこともない話が満載だ。太平洋・大西洋・インド洋が世界の三大洋と言われているけれど、インド洋はまったく性質が違うという。北極と接していないからだという。そんなこと考えても見なかった。太平洋や大西洋と比べると研究が遅れていて、これまでに、情報があまり伝わってこなかった。カバー図を見てほしい。地上にそびえているのは東にヒマラヤ、西にピラミッドとスフィンクス。地表には、インド半島、アラビア半島、アフリカの海岸線が並んでいて、そこにたっぷり水をたたえたインド洋がある。海面には昔から多くの帆船が船団をくんで航行していた。インド洋は深いけれど、多くの海山があり、現在、温泉水を噴出しているものもある。そして、スケリーフット、シーラカンスなど、ふしぎな生きものたちが棲んでいる。なるほど、シーラカンスはインド洋にしかいない。

著者は海水の化学分析を専門とする地球化学者。世界中の海洋を研究しているが、インド洋も計8回、のべ200日も調査している。インド洋は我が庭のようなものだろう。インド洋をもっとくわしく見ていこう。章扉の写真は大変美しい。どうやって作成したのだろう。著者は、インド洋の形を二つの巨眼と一本槍をもつ特異な「かたち」と記述する。たしかに、ベンガル湾とアラビア海はまるでインド洋を見下ろす「二つの巨眼」のようだし、東経90度海嶺はまるで一本槍のように、まっすぐ、経線に沿って真北を指す。見慣れている天皇海山群は曲がっているのだから、まっすぐの海嶺もあるのだとびっくりする。

インド洋の深海底を調査してみる。熱水噴出孔を探して、ロドリゲス三重点あたりを必死に調べる。なかなか

うまくいかない。なんと、熱水噴出孔は2200mの深さにあった。太平洋でも大西洋でも4000mを超える深海にあるのに。この調査に海水の化学分析は大いに有効なのだそうだ。

モンスーンとは「季節によって向きが変わる風」のことだったそうだ。紀元前のヒッパロスの頃からわかっていたという。海賊も季節にしたがって稼業したようだ。実は向きが変わるのは、風だけではなく、海流も夏と冬とで流れる向きが完全に逆転するのだそうだ。黒潮も親潮も季節により、流れる道筋が違うけれど、逆転はしない。いよいよインド洋が奇妙な海ということが伝わってくる。その骨頂が、1999年に日本人研究者により発見されたダイポール(二つの極)モード現象。インド洋の熱帯海域において、正反対の気候状態が同時に、東西に横並びになること。東側は低温で晴天続きである一方、西側では高温で豪雨に見舞われるとなる。世界中の異常気象をもたらしている「影の大将」である。

そして、インド洋はまるで「日本のふたご」の片割れだと著者はいう。巨大地震、巨大津波、火山の噴火など。日本より非常に巨大だ。プレートの沈み込みにもなう現象である。インド洋はとても遠いところにあつて、まるで日本とは関係ないように見えるが、実は日本列島の研究に重要なヒントをあたえてくれるところである。

本書を読み終わったら、もう1度、同じ著者の『日本海』と『太平洋』を読み直してみるとよい。さらに理解が深くなるだろう。

文献

蒲生俊敬「日本海 その深層で起こっていること」講談社ブルーバックス, 2016年。

蒲生俊敬「太平洋 その深層で起こっていること」講談社ブルーバックス, 2018年。

(東京都立大学 矢島道子)

2021.9.2 受付

2021.11.26 学会ニュースレター公開

2021.## 学会ホームページ公開